

セズギ・ドゥルゲン著『王の領地から祖国へ』

小笠原, 弘幸
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1806124>

出版情報 : 史淵. 154, pp.147-154, 2017-03-17. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

〈書評〉セズギ・ドゥルゲン著 『王の領地から祖国へ』

小笠原 弘 幸

トルコ共和国建国期に進行した国民形成のプロセスにおいては、歴史学・言語学を中心に、人類学・考古学・民俗学・音楽など、あらゆる種類の学問が動員された。地理学もその例外ではなく、トルコ国民創造の一翼を担ったはずである。共和国建国期の歴史学については、公定歴史学とも呼ばれる「トルコ歴史テーゼ」¹の成立を批判的に分析したビュシュラ・エルサンルの先駆的な研究²以降、近年さかんに研究が進められている分野である³。それに対して、地理学や地理認識を扱った研究はやや立ち遅れている。しかしそれでも、共和国期に作成された、主として教科書に収録されている地図約600点を利用して地理認識の変遷を検討したエティエンヌ・コポー『1931年から現在までの地図から見たトルコ人の世界観』⁴や、オスマン帝国期ではあるが、近代学校教育での地図利用について一章をさいたベンジャミン・フォルトゥナ『帝国の教室：オスマン末期のイスラム、国家、教育』⁵などにより、少しずつ研究が蓄積されつつある。本書でも触れられているように、トルコ共和国における地理学の形成は歴史学・言語学に比較して遅かった。地理学・地理認識を対象とする研究の薄さは、そうした地理学の「出遅れ」が影響しているかもしれない。その意味で、オスマン帝国末期からトルコ共和国初期における地理認識の変遷を扱った本書の意義は大きいといえよう。

著者セズギ・ドゥルゲンは、1974年にイズミルで生まれ、ボアジチ大学の哲学部で学士と修士を修めた後、政治学にかかわり、2004年にハンガリーの中央ヨーロッパ大学政治学部で改めて修士号を得た。2001年にはマルマラ大学の政治学科で博士号を取得、2016年現在、同学科で助教を務めている。こ

れまでに政治学、哲学を中心とした多数の論文を著している⁶彼女の関心は幅広く、近代国民国家における地理認識についての研究も進めており、その問題意識が結実したのが本書である。まずは本書の目次を提示したうえで、内容を紹介してゆきたい。

序論

第一章 政治、地理、国民国家

第二章 民族主義の諸理論、近代化、地理的紐帯

第三章 王の領地から祖国へ

第四章 国民戦争：衝突する祖国の諸イメージ

第五章 エスニックな時間と土地：民族と祖国

第六章 建国期のオルタナティヴとしての民族主義的諸概念と祖国

第七章 国内を祖国化する

第八章 共和国の子供たちへの地理授業

第九章 結論

序論では、本書の問題意識として、国民国家の形成にともなう集合的記憶としての地理意識の変化、そしてケマリストの民族主義言説における祖国概念などが挙げられたのち、各章の内容についての見通しが提示される。

第一章と第二章では、地理、政治そしてナショナリズムにかかわる理論的諸問題が概観される。まず第一章では、ヨーロッパにおける地理認識とナショナリズム、国民国家とのかかわりに触れ、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーにはじまるヨーロッパの地理思想の発展を、フランスとドイツの例に焦点をあてて説明している。つづく第二章は、ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論やアントニー・スミスのエトニ概念を、トルコの事例にどのように総合しつつ適用するかが論じられる。

本書の書名でもある「王の領地から祖国へ」と題された第三章では、オスマン帝国末期において、祖国概念がどのように展開し定着したかが論じられ

る。オスマン帝国においてもともと祖国意識は見られず、家産的な国家体制のもと、帝国の領土は王の領地として認識されていた。それに対して、19世紀後半の国民国家への移行過程において、まず新オスマン人と呼ばれたナムク・ケマルやシェムセッティン・サーミーが祖国意識を強調した議論を行うようになる。20世紀にはいると、青年トルコ人の世代に属するユースフ・アクチュラやズィヤ・ギョカルプなどのトルコ主義者たちが、それぞれニュアンスを異にするかたちで祖国と民族意識を結び付けた。こうした大きな変化のほかに本章では、大トルコ主義と小トルコ主義⁷の論争、ドイツ軍人フォン・デア・ゴルトツの国民皆兵論に影響された「基地としての祖国」論、「テュルキエ (Türkiye)」という国号導入の問題なども検討されている。

第四章では、セーヴル条約から国民闘争をへてトルコ共和国建国に至るまでの祖国イメージが論じられる。第一次世界大戦の敗北後、セーヴル条約によってオスマン帝国は分割される。分割に反対して、独立戦争とも呼ばれる国民闘争が開始されるのだが、その時期の祖国意識の発生と展開について、先行研究においてふたつの解釈が存在する。ひとつは、各地で起こったさまざまな地域的な抵抗は、早い時期からひとつの祖国意識に収斂したというものである（「目的論的思考」）。ふたつめは反対に、さまざまな局所的な抵抗のベースとなった地域的な意識は、ひとつの祖国意識を反映しているわけではない、とするものである（「微視的視座」）。著者は、祖国の一体性意識の形成は遅かったとして、後者の視点をより妥当と見なす。本章ではほかに、国民誓約にみられる祖国概念や、モスル領有の主張がトゥラン意識にもとづいて行われたなどの分析が行われている。

第五章は、トルコ歴史テーゼと祖国意識との関わりに焦点が当てられる。著者はトルコ歴史テーゼを、古代中央アジアとアナトリアを結ぶ「超歴史的回廊 (tarih dışı bir koridor)」というべき考えであると評したうえで、テーゼにおける地理的主張－中央アジアからアナトリアへの移動、民族的起源をヒッタイトまでさかのぼること、短頭人種⁸がヨーロッパに文明をもたらしたこと、地理としての新しいリアリティを作ること（イレデンティズムの放棄）－を検討し

ている。テーゼは、国内の土地と民族との関係をつくるために、1) 小トルコ主義の中心であるアナトリアの政治的・文化的所有者であることを示し、2) 大トルコ主義（中央アジアとの関連）を神話的地理解の中にも位置づけ、3) 国内の土地におけるアイデンティティ形成のために文明性を同胞意識に取り込んだ。また、テーゼが現実の政治に影響を与えた顕著な事例として、ハタイ問題が取り上げられる。現在のアンタクヤを中心とするハタイ地方は、オスマン帝国崩壊後はフランスの委任統治領となっていたが、さまざまな運動や交渉を経て、最終的に1938年にトルコに併合された。この際にトルコ側が論拠としたのが、ハタイに多く住むヌサイリー派住人はもともとトルコ人（「ヒットイト系トルコ人」—「ハタイ」という呼称はヒットイトに由来する）であったという、テーゼに基づいた主張であった。⁹

第六章は、テーゼと同じく建国期に存在した、しかしテーゼに回収されえない、いわば伏流というべきトルコ主義のあり方が論じられる。とくに焦点があたり得るのは、知識人ヒルミ・ズィヤ・ウルケンのとらえた「人間的祖国愛主義（*insani vatanserverlik*）」である。1918年に刊行された『アナトリア』誌において、ウルケンや歴史研究者ミュクリミン・ハリル・イナンチュは、中央アジアやセルジューク朝・オスマン朝に自分たちのルーツを求めるところから一線を画し、アナトリアという地域に根差した祖国愛を主張した。こうしたアナトリア主義は、1960年代に起こった「青いアナトリア主義（*Mavi Anadoluculuk*）」—ギリシャ・ローマの遺産も古代アナトリアの先人として、自分たちのルーツの中に組み込む—などの潮流につながっていった。¹⁰

第七章は、国内の空間が、権力によって新たに整理されてゆくプロセスを検討している。特に重視されるのは、1941年に開催された第一回地理学大会である。この大会は、地理学の組織化、民族的地理の教科書への反映、そして祖国の定義づけの観点から画期となるものである。本章ではとくに「社会的場所」や「想像されたエスニック的場所」を表象するターミノロジー、地域の分割、そして学校地理にかんする議論に注目して検討を行っている。大会では、「地理にトルコ性の刻印を押すこと」の必要性を主張する者たちと、「地理

を自身の伝統とつながりから切断すべきではない」とする者たちの間で議論が起こった。すなわち前者は、地名をトルコ風に改名することを主張し、後者は、地名は伝統を反映しているから改名には慎重になるべきである、と主張した（実際には、トルコ風の名称への改名が進んでいた¹¹）。また地域分割の方法についてどうすべきかの議論がなされたほか、地理教育の遅れが指摘され、地理用語のスタンダード化が叫ばれたという。

第八章では、地理教科書の分析を通じて、地理知識の民族化における教育の役割と言説が取り扱われる。国境・同胞意識・祖国愛を植え付けるための学校の言説は、共和国の子供たちにどのように民族地理を教えたのだろうか。本章での教科書の分析は、第一回地理学大会を境とするふたつの時期に区切って行われている。第一の時代は1928年から1941年までであり、この時代に著された13点の教科書を対象としている。第二の時代は1941年から1950年までで、9点の教科書が用いられている。著者によれば、第一の時代の前半では、オスマン時代と同様にトルコ民族以外の諸民族への言及があったが、後半になると同質的なアナトリア・トルコ人アイデンティティのみが強調されるようになったという。また世界地理を論じる際にアジアが優先的に取り上げられ、アナトリアと中央アジアとの一体性が主張されているが、これはトルコ歴史テーゼの影響にあるゆえであると位置付けている。ギリシャやブルガリアなど、トルコをとりまく隣国に対する「地図上の危機意識（kartografik endişe）」の強調も、この時期の教科書の特徴であった。これに対して第二の時代では、アジアよりも西洋的なアイデンティティに重心が置かれており、世界地理でまず重視されているのはアメリカであった。また、隣国への危機意識は薄まり、商業的な観点からの記述が増加した。これ以外には、トルコの地政学的な位置や、東西の懸け橋としてのトルコの位置が強調されるようになったという。

第九章の結論では、これまでの検討の内容を要約するとともに、1950年以降の状況について概観している。

本書評の冒頭において評者は、共和国史の分野では地理学・地理認識視点に

ついでの研究が立ち遅れており、その意味で本書の意義は大きいと指摘した。しかし本書が持つ意義は、研究のエア・ポケットの単なる「埋め草」としての価値ではない。とくに評者が興味をひかれたのは、オスマン帝国末期から共和国形成期にいたる地理認識の変遷過程を、「オスマン帝国という多民族国家から、単一民族のトルコ国民という想像の共同体へ」という単線的な枠組みに収めることなく描き出したことであった。すなわち、第三章ではオスマン帝国において複線的な民族意識の潮流があったことが示されている。第四章では、国民闘争がそのまま「祖国トルコ」意識にオートマチックに接続されたわけではなく、別の可能性の存在が提示されている。第五章ではトルコ歴史テーゼに代表されるトルコ主義的な地理認識が主流になっていくさまが描かれるが、すぐあとに続く第六章はそれとは様相を異にするアナトリア主義の諸潮流を示す。こうした本書の叙述と構成は、1980年代より登場し2000年前後を境に急速に進展した、共和国史研究の潮流—アタテュルクの革命とケマリズムに収斂する目的論的叙述を脱し、オスマン帝国期との連続性およびケマリズムに対するオルタナティブに着目する—に掉さすものと位置づけられるだろう。全体の約三分の一を占める第七章・第八章での、地理学大会や地理教科書の分析も独自性が高く、読み応えがある。

一方で、それ以外の章についてはやや踏み込みに欠ける点も見受けられる。ヨーロッパの事例や理論的なまとめを行った第一章・第二章はともかくとしても、第三章から第六章については、先行研究で一般的に提示されているトルコ・ナショナリズム史の図式に、比較的名の知られている知識人たちの持つ地理認識の事例を落とし込むかたちで議論が展開されている。たとえば、第三章で取り上げられる新オスマン人や青年トルコ人、アクチュラやギョカルプの「祖国」「トルコ人」認識についての分析には、いくぶんの既視感を感じる。こうした代表的な思想家に注目するよりむしろ、この時期に著されたさまざまな地理書を丹念に収集し分析する方向性もあつたのではないだろうか。たとえば、イスラム歴史・芸術・文化研究センター（IRCICA）が刊行しているオスマン帝国の地理文献目録によれば、19世紀後半以降に限っても300点以上の地

理関係の作品が著されている¹²。これらすべてを網羅的に分析する必要はないだろうが、もともとある図式に情報を当てはめるのではなく、史料から積み上げてゆく形で議論を組み立ててゆけば、より実証的な形で地理認識の変遷史を提示できたと思われる。

また第五章はトルコ歴史テーゼに焦点が当てられているが、基本的には先行研究の手際よいまとめに終始している。第七章・第八章にもトルコ歴史テーゼについての言及があるが、先行研究が示した枠組みにそのまま当てはめて解釈しているきらいがある。たとえば本書269頁や276頁では、教科書においてアナトリアと中央アジアの連続性が主張されておりこれをテーゼの影響とするが、テーゼほど極端ではないトルコ主義の影響も十分に想定できよう。かつて評者は、歴史教科書へのテーゼの影響は一様ではないと指摘したことがあるが¹³、同様に地理教科書への影響も「むら」があったのではないだろうか。

こうした物足りなさ、歴史学をディシプリンとする評者が感じるものねだりであり、政治学・哲学をそのディシプリンとする著者に要求するのは的外れかもしれない。むしろ本書の役割は、国民形成において地理意識がどのような変遷を遂げたかの全体像を提示したところにあり、実証的な詰めと微修正は、今後の研究に委ねられているのであろう。

Sezgi Durgun, *Memalik-i Şahane'den Vatan'a*, İstanbul: İletişim, 2011, 328p.

注

- 1 1930年代を通じ、ムスタファア・ケマル主導によって歴史教育の場を中心に推進された歴史観。古代の中央アジアでトルコ民族は偉大な文明を築いていたが、乾燥化によってその文明は崩壊、トルコ民族は世界中に散らばり各地に文明をもたらしたとする。これによれば、古代アナトリアのヒッタイト人やアッシリア人もトルコ民族とされた。テーゼについてより詳しくは、永田雄三「トルコにおける「公定歴史学」の成立：「トルコ史テーゼ」分析の一視角」『植民地主義と歴史学—そのまなざしが残したもの』刀水書房、2004、107-233を参照。
- 2 Büşra Ersanlı, *İktidar ve Tarih: Türkiye'de "Resmi Tarih" Tezinin Oluşumu, 1929-1937*, İstanbul: İletişim, 1996 (2nd ed., 1st ed. 1992).

- 3 ふたつ例をあげれば、Ebru Boyar, *Ottomans, Turks and the Balkans: Empire Lost, Relations Altered*, London: I.B.Tauris, 2007; Doğan Gürpınar, *Ottoman/Turkish Visions of the Nation, 1860-1950*, New York: Palgrave Macmillan, 2013。
- 4 Etienne Copeaux, *Une vision turque du monde à travers les cartes de 1931 à nos jours*, Paris: CNRS Éditions, 2000.
- 5 Benjamin C. Fortna, *Imperial Classroom: Islam, the State, and Education in the Late Ottoman Empire*, Oxford: Oxford University Press, 2002.
- 6 著者の業績については、彼女の個人ウェブサイト（www.sezgidurgun.com、2016年8月19日閲覧）を参照されたい。なお本書について、簡単な新刊紹介以外の本格的な書評は現在のところ著されていない。
- 7 日本の研究においては、ここでいう大トルコ主義を「パン・トルコ主義」、小トルコ主義を「アナトリア・トルコ主義」と呼ぶのが通例である。
- 8 トルコ歴史テーゼにおいては、頭蓋骨の形質から、トルコ人は人種的に優れた「短頭人種 brakisefal」に属するとされた。
- 9 ハタイ問題については、本書と同年に刊行された次の研究書が本格的に論じている：Sarah D. Shields, *Fezzes in the Rever: Identity Politics and European Diplomacy in the Middle East on the Eve of World War II*, New York: Oxford University Press, 2011。
- 10 アナトリア主義も、近年少しずつ注目を浴びつつあるテーマである。アナトリア主義の源流の一人である知識人ヌーレットイン・トプジュについては、M. Asım Karaömerlioğlu, “The Role of Religion and Geography in Turkish Nationalism: The Case of Nurettin Topçu,” P. Nikiforos Diamandouros, Thalia Dragonas and Çağlar Keyder (eds.), *Spatial Conceptions of the Nation: Modernizing Geographies in Greece and Turkey*, London: I.B.Tauris, 2010, 93-109。日本では田中英資が、文化遺産との関係を通じてアナトリア主義についても論じている（「トルコ人と古代アナトリア文化遺産—「国土」へのアプローチの多様性と文化遺産」『文化資源学』7(2008), 43-56）。
- 11 オスマン帝国末期から共和国期におけるトルコ南東部（とくにウルファの事例を取り上げている）の同化政策を、地名の変更についても言及しつつ、歴史的・空間的側面に着目し分析した研究として、Kerem Öktem, “Incorporating the Time and Space of the Ethnic ‘Other’: Nationalism and Space in Southeast Turkey in the Nineteenth and Twentieth Centuries,” *Nations and Nationalism* 10/4(2004): 2004, 559-578。
- 12 Ekmeleddin İhsanoğlu (ed.), *Osmanlı Coğrafya Literatürü Tarihi*, 2 vols., Istanbul: IRCICA, 2000.
- 13 小笠原弘幸「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成—高校用教科書『歴史』（1931年刊）の位置づけ」『東洋文化』91 (2011), 289-309.